

要旨

『ガラスビーズに至るまで』

ー チェコと日本の現代ガラス美術の比較 ー

東京藝術大学大学院

美術研究科博士後期課程

工芸専攻 素材造形（木材・ガラス）

第14研究室（ガラス造形）

学籍番号 1323914

ポシュトヴァー ヴェントウロヴァー クリスティーナ

本研究の出発点は、筆者が2016年に富山市ガラス美術館で日本の現代ガラス美術と出会い、その独自の魅力に深い感銘を受けた経験にある。同館の《Feeling in Glass -感じとるかたち-》展において、扇田克也、小田橋昌代らの作品群は、チェコで慣れ親しんだガラスに対する姿勢と大きく異なり、素材への向き合い方や美的価値観の差異を鮮明に印象づけた。この体験を契機として、筆者はチェコと日本の現代ガラス美術の比較研究を志すに至った。

本論文の目的は、チェコと日本の現代ガラス美術における二国間の対話に貢献することである。そのために、第一に両国の現代ガラス美術に存在する主な共通点と相違点の一部を明らかにし、第二にチェコのガラス作家である筆者自身の事例を通して、日本文化との出会いが美意識と創作過程にどのような影響を及ぼし得るかを解明することを試みた。

方法論としては、両国の現代ガラス作家45名を対象としたインタビュー調査および文献調査を実施し、体系的な比較を行った（第1章）。さらに、チェコ出身のガラス作家である筆者自身の来日前後における創作過程を自己エスノグラフィーの手法によって検証し、日本滞在6年以上にわたる経験を分析した（第2章）。そして博士審査展で発表した作品シリーズ《感情の在り処》を取り上げ、研究成果の具現化として考察した（第3章）。

調査の結果、両国の現代ガラス美術には三つの主要な相違点——「美意識と自然との結びつき」、「政治的影響」、「教育制度」——と、二つの共通点——「近現代ガラス美術の源流」、「国際交流」——が認められた。第一に、チェコの作家と比べ、日本の作家の美意識は自然とより密接に結びついている。第二に、チェコのガラスは日本にはなかった社会主義体制下での検閲や国有化、制作の制約といった強い政治的圧力を受けてきた。これらは社会全体に否定的な影響

を及ぼした一方で、逆説的にチェコスロヴァキアにおけるガラス美術の発展を加速させた。第三に教育制度において、チェコは19世紀から続くガラス専門高等学校を基盤とし、大学の研究室へと接続する長期的かつ体系的な教育制度を特徴としている。これに対し、日本ではガラスが独立した分野として制度化されたのは比較的近年であり、多くの学生は大学入学後に初めて専門的に学ぶ。両国の制度は作家の創作に対する姿勢に大きな影響を与えている。

また、両国には重要な共通点も確認された。第一に、「近現代ガラス美術の源流」であり、両国における個人作家によるガラス美術の本格的な発展は20世紀後半から始まったが、それ以前から日本で岩田藤七や各務鑑三、チェコでヨゼフ・ドラホニョフスキーやヤロスラフ・ホレイツといった先駆的作家が存在し、ガラスを芸術の域にまで押し上げることに大いに貢献した。第二に、2カ国のガラス界における「国際交流」であり、両国の作家は展覧会やシンポジウム、ワークショップなどを通じて互いに刺激を与え合い、新たな技法や表現を導入してきた。

さらに、45名の作家とのインタビューを通して、チェコの作家は制作前にコンセプトや形態を体系的に構築する傾向が強いのに対し、日本の作家は素材との対話や偶然性も重視し、制作の過程で形態を変化させる傾向が比較的強いことが確認された。

一方、自己エスノグラフィーに基づく分析からは、日本文化との出会いが筆者自身の美意識と創作過程に五つの重要な変化をもたらしたことが明らかになった。すなわち、①実験する勇気の獲得、②コンセプト形成への多様な道の発見、③偶然性と有機的造形の魅力への気づき、④自己と自然の一体感の自覚、⑤理解の手段としての制作である。これらの変容は第3章の作品シリーズ《感情の在り処》において総合的に具現化され、筆者にとって新たな表現の方向性を示す試みとなった。

本研究の理論的意義は、従来のガラス美術研究において十分に検討されてこなかった文化的背景を対象に比較分析の枠組みを提示し、文献のみに依拠せず2カ国の作家を対象とした、前例のないインタビュー調査を実施した点にある。さらに、自己エスノグラフィーという手法を導入することで、文化的遭遇が作家の内面的変容に与え得る影響を考察し、従来の外的観察に依拠した研究では得られにくい深層的理解を可能にした。これらの成果は、チェコと日本の現代ガラス美術における相互理解を促進し、今後の国際的な対話と協働の基盤を提供するものである。